

最終回 弁護士

青木 正芳さん＝1953年度卒

対立意見、謙虚に聞いて

日本弁護士連合会の人権擁護委員長などを務めた弁護士、青木正芳さん（83）＝1953年度卒＝は、法廷で「私は（宮城県）古川高校の出身で」と陳述を始めることがあります。それは「古高で育った」との思いからだそうです。そして、その体験を基に「対立する意見を謙虚に聞く姿勢を身に着けて」と、在校生に呼びかけます。



古高に入学してすぐ、野球部に入りました。中学ではピッチャー。高校でも「これ以上遠投できないとプロ野球に入れな」といわれていた95メートルを投げられました。ユニホームを作り、春の大会（第2回県下選抜高等学校野球大会）に球拾いで参加しました。でもその後、野球部長の大山（恒二）先生に「おふくろが来たぞ。肺病になったら大変だから野球部を辞めさせてくれ、って言うけどどうする？」と聞かれ、「じゃあ、辞めます」と答えました。小学校の時、胸膜炎を患ったのです。

その後、お医者さんに「ピッチャーだと不安だけど、補欠なら」と言われたので、バレーボール部に入りました。合宿をしたりするうちにだんだん楽しくなりましたが、（練習は）たいへんでした。雪の中、長靴で高校から（片道6キロ以上ある鳴瀬川の）志田橋までランニングさせられたのは、いや一つらかった。

生徒会長もしました。「軟式野球部を作って」と要求があり、生徒大会で作ると決めたら、校長のこあくつ小塚洋さんに呼ばれました。「硬式があるのに軟式野球部とは何ごとか。やめろ」と言うので、むっとして「やりたい人がいるんだから作らなきゃだめです」って突っぱねました。校長が、全員坊主頭にする「断髪令」を出した時も「自由に認めたらいいじゃないですか」とやり合いました。

その校長は英語の授業もしました。「venerable face」を「尊敬すべき顔」と訳したところ、「具体的に説明しろ」と言われて立ち往生しました。そうしたら「土と取り組み懸命に働いてきた農民の顔や手は、しわがいっぱいかもしれないが、人生の歴史が刻み込まれていて、頭の下がる思いがする。そのような顔のことだ」と教えられました。ただ単語を日本語に訳すのでなくて、その言葉の背景をきちっと理解しなさい、と教育してくれたのです。校長が生き方について問題提起をしてくれた感じがしました。

2年の時に同級生から「何になるの？」って聞かれて「弁護士。勉強すれば受かっぺやー」と言ったのを覚えています。新聞かラジオだったか、布施（辰治）さんが労働者の立

場で弁護士活動をやっていると聞き、労働弁護士になろうと思いました。私たちの家も一生懸命働いても経済的にあまり明るさが出てこないの、働けば報われるようにしたいと考えたのです。

弁護士としても「真剣に生きた顔 (venerable face)」という言葉をお大切にしてきました。刑事事件で「やっていない」と訴える人と、本当にそうなのか、と顔をお互い見つめながら、心境を率直に語り合います。それでお手伝いをお断りすることもあります。どうすれば手を差し伸べられるか考えさせる顔があります。

後輩には、自分の考えを持ちながらも、対立する意見などを謙虚に誠意を持って聞き議論する姿勢を、身に着けてほしいですね。社会に出たらすべてそうだし、家庭でもそうだと思います。

あおき・まさよし

1935年、旧広瀬村（旧宮城町を経て仙台市）生まれ。41年、旧志田村（旧古川市を経て大崎市）に転居。東北大学法学部卒。62年、弁護士登録。再審無罪となった弘前大学教授夫人殺人事件や松山事件、労働訴訟、公害訴訟などの弁護を手がける。仙台弁護士会会長、日本弁護士連合会副会長・人権擁護委員長・司法改革実施対策会議座長などを歴任。現在も、法廷に立つ。



古高卒業生

私の思い出

◇下駄が運動靴に

在京古高同窓会事務局長

佐々木恭次さん (74)

1962年度卒、埼玉県新座市

9年の長きにわたって務められた小坪洋校長がビスマルクの政治哲学を壇上で話されたのが強い印象に残っております。放送設備がない時代で、私語は壇上から一喝されたものでした。鉄筋校舎が一部できあがり、下駄履きから運動靴に切り替わった時期で、冬に雪駄を履いてきたのをとがめられたのも懐かしく思い出されます。

◇担任宅で昼食会

菊地忠夫さん (73)

63年度卒、宮城県大崎市

「井の中の蛙大海を知らず」を痛感した有意義な青春時代。2年次担任の栗原敏夫先生はクラスの生徒10人ずつを土曜日ごと

に自宅へ招待し、奥様手作りの料理で昼食会。先生がおっしゃるには「名前と顔を覚えるためにやっている」。2年次からドイツ語の授業があり、古高生としてのプライドも強まった。担当の高橋養先生には、人を引きつける不思議な魅力を感じた。

◇応援団で3年間

小原善博さん (65)

70年度卒、宮城県気仙沼市

入学した時の応援団の先輩たちの怖さは強烈な思い出として残っているが、2年生の先輩から入団を勧められ、自分も応援団員として3年間を過ごしたことは人生の貴重な思い出の一つ。今年の野球部が選抜高校野球の21世紀枠東北地区候補校となったことはうれしく、何とか甲子園出場をと祈念している。